

ポスト冷戦研究会 2001 年度第 2 回研究会

2001 年 7 月 14 日（土）

GNU/Linuxの開発とマルクスの普遍的労働

神奈川県立高津養護学校教諭

岡田 卓己（おかだ たかし）

最近コンピュータの分野で注目を集めているGNU/Linuxシステムに代表されるフリーソフトウェア開発の歴史を中心に述べる。その開発の＜理念＞を紹介するとともに、ソフトウェア生産の分野で「価値法則」の枠に押し込まれてきた精神的労働の生産物が、商品であることを止める可能性について例証する。マルクス『経済学批判要綱』にみられる「普遍的労働」発展がもたらす価値法則止揚の可能性の論述は、21世紀をむかえた今日こそ現実的な課題となっている。

第一に、マルクスは技術革新とオートメーション化によって、商品に対象化された「直接的労働」の比率が減少し、そのことが価値法則の作用する範囲をせばめ、ついには価値法則を止揚するととらえていたこと。

第二に、インターネットの急速な発達と普及は、全世界的に精神的労働が結合することを可能とし、ソフトウェア開発の分野で「価値法則」の枠に押し込まれた精神的労働の生産物が、商品であることを止める可能性を示していること。

第三に、上記の可能性は人々の不断努力によってはじめて現実のものになる。その点で、GNU/Linuxシステムを開発してきた多くのプログラマたち、とりわけその先駆者で「プログラミングの自由」を主張し、GNUシステムの開発を続けている、リチャード・ストールマン（Richard M. Stallman）の思想と行動から学ぶ必要がある。

0. 小さな学習会で問題になったこと

ー現代資本主義でマルクスの言う剰余価値生産は可能かー

(1) 問題提起＜桜美林大学 毛利明子氏＞

- ・これまでの資本主義は、ナショナル・エコノミーを基礎と価値増殖を行ってきたが、1970年代から急速に多国籍企業になっていった。
- ・企業の多国籍化は、安い労働力を使った価格競争が限界に達したため、競争は技術競争へ移ったためだ。つまり、『資本論』でいえば、相対的剰余価値を手に入れるためだ。新技術を求めるために、まず先進資本主義国から、アメリカとヨーロッパ間で、企業の「相互乗り入れ」という形で多国籍化が始まった。
- ・資本が真に自己増殖するための条件である、一国規模を枠とする階級構造は崩れつつある。また、技術革新によって、価値の尺度のはずの商品に含まれる直接的労働の量は急速に減少している。多国籍企業は、マルクスが『資本論』で言うような意味での剰余価値の生産を、これからも行い続けることが果たしてできるのか。

(2) 家電メーカーに勤務するエンジニアの意見。

- ・インテルはCPUを販売し、膨大な利益をあげることができる。何故可能なのか。
- ・CPUの生産にはチップのパターンを設計し、かつそのチップの内部に動作を制御す

るプログラムを埋め込む必要がある。だからCPUの開発には、高度な技術力と開発技術者の膨大な労力が必要となる。

- ・だが、CPUを大量生産する段階では、シリコンウェハーからパターンを取り出し、それをパッケージ化することの製造コストは極めて安い。そのCPUが大量に市場に出回れば、販売初期の段階で開発費は回収される。
- ・だからインテルは開発のノウハウを企業秘密や特許で守り、他のメーカーが同等の物を製造できないようにして、膨大な利益をあげている。
- ・これはマルクスの言う資本主義的な生産に合致しているのだろうか。

いずれも「現代資本主義の技術革新の中で、価値法則はどのように貫かれ、また止揚されるのか」が問題提起された。これらの問題意識に触発されて、本稿の1稿は書かれた。

1. サーバ分野で成功をおさめるGNU/Linuxシステム

(1) マイクロソフト社の、ソフトウェア市場の独占

- ・ MS社は、自社のオペレーティングシステム(OS)を事実上の標準とすることで、アプリケーション分野でも、市場の独占をはかり得た。
- ・ ソフトウェアの複製は、極めて簡単に・安価に作れるので、著作権や特許で、自社製品の複製を禁止してきた。

(2) 最近のフリーソフトウェア、特にLinuxへの注目

- ・ IBM社など、全社をあげてサポート。
- ・ ソースコードの公開、配布・改良も自由。インターネットを通じて、数千人の人が開発をサポート。
- ・ その結果、サーバの性能・安定性はMS社のNT/2000サーバより優れる(と思う)。
- ・ GNUシステムをはじめとする開発環境、WebサーバのApache、DBMS(データベース)のPostgreSQL、MailサーバSendMail・・・なども、フリー/オープンソース。

(3) MS社も脅威を認める(ハロウィーン文書 1998年)

- ・ インターネット中の何千人もの集合的なIQを集めて、それを有効に利用できるという能力は、まさに驚異的なものである。
- ・ Linuxは、サービスやプロトコルが共有物になっている限り勝ち続けられる。・・・OSSプロジェクトが多くのサーバ・アプリケーションに食い込めたのは、高度に共化された単純なプロトコルが広く使われていたからである。これらのプロトコルを拡張して新しいプロトコルを開発すれば、OSSプロジェクトの市場参入を防止することができる。

2. フリーソフト開発における、ストールマンとリヌース

(1) プログラムの自由な共有の時代から、独占的著作権主張まで

- ・ コンピュータの開発当初から、ソフトウェアの共有は当たり前のことだった。科学上の発見と同じように、先人達の成果の上に、新しいプログラムを作る。
- ・ 1970年頃開発された、UNIXも、大学などへはほぼ無償で提供され、そこでは自由

に改良もなされていた。

- ・ 1982年AT&TはUNIXの独占的著作権を主張、ライセンス料の請求。

(2) リチャード・ストールマン (Richard M. Stallman)、GNUプロジェクトを開始

- ・ ストールマンの考え

ソフトウェアや科学上の発見などの精神的労働の成果は、開発や発見までどれだけ困難が伴おうと、一度開発や発見がなされれば、空気と同じように誰でもが自由に利用できる人類が共有すべき社会の富である。科学上の発見に、著作権や特許が認められないのと同様に、ソフトウェアにも著作権や特許が認められるべきではない。したがって、排他的な所有権に基づいてソフトウェアの使用を認める考え方は、反社会的であり、非論理的でもある。

- ・ ストールマン、MITを退職して、1984年GNUプロジェクトを開始。

UNIXと互換性がありより高機能なフリーなOSを作り出す活動を始める。多くのプログラマーが協力。UNIX系OS上で動作する多数の有益なプログラムが作られる。

- ・ 一連のソフトウェアはGNUシステム (GNUは"GNU's Not Unix"の略だという) と名付けられ、『GNU 一般公有許諾書』 (GNU General Public License : 以下GPL) に従って配布・使用が許可されている。

GPLでは、ユーザーの権利を守るために、配布されたソフトにGPLが適用されるだけでなく、最も重要な点として、変更したソフトや別のソフトと組み合わせられて作られたソフトにもGPLが適用されることになっている。

GPLの精神を「コピーレフト (Copyleft)」と呼んでいる。

- ・ 1990年頃までに、GNUプロジェクトは、UNIX互換の多くのプログラムを作成したが、OSの最も根幹をなし、OS全体の動作をコントロールする、カーネルと呼ばれるプログラムが未完成だった。(一つの独立したOSとしては機能しない)

(3) リヌース・トーバルズ (Linus Benedict Torvalds) によるUNIX互換カーネルの開発

- ・ 1991年、ヘルシンキ大学の学部学生だったリヌース・トーバルズは、MINIXというUNIXライクなOS上で、アセンブラ言語によってUNIX互換カーネルの開発に着手。わずか数ヶ月で、テスト版を発表。
- ・ インターネット上で、数十名のプログラマーが開発・改良を手伝い、1992年には正式版を完成。リヌースのカーネルは、Linuxと名付けられた。。
- ・ Linuxは、GNUシステムの様々なソフトウェアの助けを借りて、はじめてUNIX互換のOSとして動作することができる。GNUシステムとりわけGCCに敬意を払い、GPLのライセンスをつけて配布されることになった。

3. レイモンドによる、オープンソフト文化の分析

Linuxシステムは、インターネットを通して、世界中の数千人のプログラマーによって日々改善され、ますます強力なものになり続けている。この現実、これまでのプログラミングの世界の常識から見ると、奇跡のようであり、まさに魔法であった。

複雑で高機能なプログラミングには、ブルックスの法則がはたらくので、このような複雑なプログラムは、強いリーダーシップの下にしっかり組織された小集団によってしか作り得ない、と思われていた。

(1) エリック・レイモンド (Eric Steven Raymond) 論文「伽藍とバザール」1997年

○FSFにおけるソフトウェア開発方法 (伽藍型開発モデル)

- ・ ソフト開発は、FSFの少数者チーム。(中央集権的・少数精鋭)
- ・ ソフトのリリースは、バグ取りを念入りに行ってから。(時々のリリース)
- ・ 上記の特徴は、従来のソフトウェア開発法と同じ。

○Linuxにおけるソフトウェア開発方法 (バザール型開発モデル)

- ・ ユーザをソフト開発者として扱う。(誰もが開発者になれる、その数現在数千人)
- ・ しょっちゅうリリース。(目玉の数さえ十分あれば、どんなバグも深刻ではない)
- ・ インターネットによって、全世界を開発プールとして使った最初のプロジェクト。

レイモンドの得た結論

- ・ ベータテスタと共同開発者の基盤さえ十分大きければ、ほとんどすべての問題はすぐに見つげられて、その直し方もだれかにはすぐわかるはず」(「リヌースの法則」と命名) インターネットはその条件を十分に満たすことができた。
- ・ 優れたアイデアは「だれかが思いついたいいアイデアから」出発する。世界中の誰か一人の頭の中に、優れたアイデアがひらめきさえすれば良い(洞察は個人から)。とすれば、問題は「いかにすれば、そのアイデアをつぶさずにおけるか」「洞察をもてるような人たちをたくさん育てるにはどうしたらよいか」である。それは、「共通の理解という原理」に基づいたひとびとの対等・平等な関係にある。その関係の実現は、開発プロジェクトの中心者(たち)の優れたリーダーシップによって可能となる。
- ・ レイモンドはこの論文を、「もしかすると、最終的にフリーソフト／オープンソース文化が勝利するのは、協力が道徳的に正しいとか、ソフト『隠匿』が道徳的にまちがっているとかいう理由のためではなく(ちなみに後者については、リヌースもぼくもそうは思わない)、単に商業ソフトの世界が、ある問題に有能な人々の時間を幾桁も多くそぎ込めるフリーソフト／オープンソース界と、進化上の軍事競争で張り合えなくなるからかもしれない」と結んでいる。

(2) レイモンドの第2論文「ノウアスフィアの開墾」1998年

「ノウアスフィアの開墾」では「伽藍とバザール」で残された問題、「ハッカーたちは何故コミュニティに進んで参加し、自らのプログラムを提供するのか」が説明される。

レイモンドの結論は

これまでの「人間が持つ組織化のほとんどの方法は、希少性と欲求に対する適応行動」であるとして、財の希少性が支配する社会での「社会的地位を獲得する」2つの方法としての、上意下達方式と、交換経済をあげる。

そして第三のモデルとして、贈与の文化をあげる。

贈与文化は「希少性ではなく過剰への適応」であり、「生存に不可欠な財について、物質的な欠乏があまり起きない社会で生じる」。「過剰は上意下達関係を維持困難にして、交換による関係をほとんど無意味なゲームにしてしまう」。

こうした検討の上に、「長時間の労力をそそいで、高品質のオープンソース・ソフトを作る」ハッカーたちの行動様式・社会が、贈与の文化であるのは明らかだとする。

つまり、オープンソース・ソフト開発プロジェクトに参加するハッカーたちは「時間とエネルギーと創造性をあげてしまうことで、名声を競うわけだ」と結論する。

レイモンドはハッカーたちがフリーなプログラム開発という「評判ゲーム」に参加するための動機、「美しいソフトを設計してそれがうまく動くことの芸術的な満足」を軽んじている訳ではない。

「おもしろさというのは、ソフトに限らずあらゆるクリエイティブな仕事に言えることだけれど、ただのお金なんかよりもずっとずっと優れたニンジンなんだ」。

「ぼくたちの創造的な遊びは、技術面でも、市場シェア面でも、精神的なシェアでも、すさまじい勢いで成功を重ねてきている。ぼくたちは、もっといいソフトがつかれることを示しただけじゃない。よろこびが資産であることを証明してもいるんだ」といたるところで述べている。（W.Morrisの『ユートピア便り』1890年（News from Nowhere）にみられる思想ときわめて一致している。）

4. レイモンドのマーケティング戦略とストールマン

(1) レイモンドのマーケティング戦略

- ・ 1998年1月ネットスケープ・コミュニケーションズ社は、ウェブブラウザ、ネットスケープ・コミュニケーターをオープンソース化することを発表。その記者会見で「伽藍とバザール」がその決定に重要な役割を果たしたと言及。レイモンドはこの発表を聞くと、ただちにネットスケープ社に協力することを申し入れた。
- ・ これを行うために、オープンソース・イニシアティブという組織を準備して、オープンソース・ソフトウェアのスポークスマンとしての役割を果たすことを自らに課す。

まず、「ブランド」の作り直し。フリーソフトウェアという言葉は、「知的所有権への反発や共産主義といった、まともな会社の情報システム部長にはとうてい受け入れられないイメージがつきまとっていたのである」

(2) ストールマンの批判

- ・ 「伽藍形式」の開発モデルの実効性について語るのも、フリーソフトウェアの信頼性と性能について語るのもよいが、それだけでは不十分なのである。我われが真に語るべきは、我われの自由と原則なのである。
- ・ 「フリーソフトウェア」と「オープンソース」は、同じ範疇のソフトウェアを表わす言葉であるが、ソフトウェアとは何かということや倫理的価値観については同じことを語っていない。フリーソフトウェア運動の発展やGNUプロジェクトを牽引してきた原理原則を退け、ユーザコミュニティよりも利益重視の人が多い経営者層やビジネスユーザ層の関心を引くことをねらって、新しい表現を支持した者もいる。その結果、『オープンソース』という言い方は、高性能なソフトウェア作りの潜在的な可能性に焦点を合わせたものとなる一方、自由、コミュニティ、原理原則といった我われの基本とするものを意図的に遠ざけることとなった。

5. 「富」と「自由に処分できる時間」 ―マルクスの「普遍的労働」論に学んで―

(1) 生産力とは

- ・ 自然に対する人間の支配力 労働過程によって統制され、獲得された自然力。
- ・ 労働量から 単位生産物あたりの直接的労働が、どれだけ減少して自然力に置き換えられたか。

生産手段 可変資本にたいする不変資本の割合が、どれだけ増大したか。

生産物 使用価値の量と質がどれだけ増大したか。

労働時間 社会的必要労働が、どれだけ短縮され、自由な時間が増大しているか。

自由な時間によって、人間の個性がどれだけ発展しうるか。

- ・ 科学や伝達（交通や通信）は、「生産の潜勢力」（自然力、機械、科学・技術、社会的結合、社会的交通）。それが直接的生産過程に適応されて、はじめて直接的生産力になる。生産力の発展過程において、「生産の潜勢力」そのものの生産、すなわち「普遍的生産過程」が分化・発展する。ついには、直接的生産過程は、普遍的生産過程に転化する。（直接的労働から科学的・普遍的労働へ）
- ・ 普遍的労働

「普遍的労働とは、すべての科学的労働、すべての発見、すべての発明である。それは部分的には生きた人々との協業により、部分的には過去の人々の労働の利用によって条件づけられている」（『資本論』3巻）

「共産主義は、すべての人間を『直接的労働』から解放して、『普遍的労働』に従事させるであろうが、普遍的労働は個人的であると同時に社会的である特質を持っており、各人が個性を発揮し、創造的であればあるほど、普遍的生産力はいちじるしく発展する」（芝田進午『人間性と人格の理論』393頁）。

(2) 資本による、労働過程の価値増殖過程への包摂とその根本矛盾

・ 資本は労働時間を価値・剰余価値の唯一の尺度・源泉としながら、同時に、超過利潤（特別剰余価値）追求のため、社会的に必要な労働時間を最小限度まで引き下げようとする。資本に超過利潤をもたらすのは、自然力、機械、科学・技術、社会的結合、社会的交通などの「生産の潜勢力」を利用することによってである。「そこで資本は、これらの『生産の潜勢力』を生産する「普遍的生産」により多くの努力をかたむけるのであるが、これらの「生産の潜勢力」そのものが価値法則の作用する範囲をますますせばめる。「直接的労働」は量的にはわずかの比率まで減少させられ、富の主要な源泉であることをやめるようになる。すなわち労働時間が富の尺度であることをやめ、したがってまた交換価値が使用価値の尺度であることをやめざるをえなくなる。生産と富の基礎となるものは、人間による「普遍的生産力」の獲得、「社会的個人」の発展となる。しかし他方、資本は、このようにしてつくられた社会の諸力を労働時間で測定し、それらを価値法則の限界内におしこめようとする」。（芝田進午『人間性と人格の理論』221頁。芝田氏は、マルクス『経済学批判要綱』「ブルジョア的生産の基礎（価値尺度）とその発展それ自体のあいだの矛盾、機械等。」（大月書店、高木幸次郎監訳では653頁）を参照している。

・ ヒトゲノムの特許問題を考えれば、「普遍的労働」の生産物を、「価値法則の限界内におしこめようとする」資本の反社会的な性格は明白である。

- ・ また、前述のように、インターネットの発達、プログラミングの分野において全世界の精神的労働を結合させ、資本に従属しなくても高品質なプログラムを短期間のうちに作り出すことが可能であることを証明している。資本の「社会の諸力を労働時間で測定し、それらを価値法則の限界内におしこめようとする」強制に対して、世界中のプログラマたちが精神的労働を結合することによって「価値法則の限界」を乗り越え、自らの精神的労働の生産物を「社会の富」そのものにしようとしている。資本制社会の枠内でも、価値法則の貫徹がしだいに困難になっている現状が明らかになりつつある。

まずプログラミング労働の分野にこうした状況が出現したのは、プログラミング労働の労働対象と労働手段がコンピュータという今では「安価」な物であり、その生産物もひとたび開発されれば複製はほとんど無料という労働の特殊性があるからだろう。

(3) 「富」と「自由に処分できる時間」

- ・ 「社会の富とは何か」について、マルクスが『経済学批判要綱』で引用しているディルクの次の言葉は示唆的であり、きわめて重要である。

「12時間の労働のかわりに6時間の労働がなされると、一国民は真実に富むのである」（実在的富）「富（wealth）とは剰余労働時間の支配ではなくて、すべての個人と社会全体のための直接的生産に使用された時間以外の自由に処分できる時間である。」

- ・ しかし、資本は、必要労働時間の増大を、剰余労働時間の維持・拡大としてとらえ、労働者の「自由に処分できる時間」とはしない。（労働時間をめぐる闘争の必要性）

「社会一般と社会のすべての構成員にとっての必要労働時間以外の多くの自由に処分できる時間（すなわち個々人の、したがってまた社会を十分に発展させるための余裕）の創造、非労働時間のこうした創造は、資本の立場では、あらゆる先行諸段階と同様に、少数者にとっての非労働時間、自由時間として現れる。資本の付加するのは、資本は大衆の譲与労働時間を芸術と科学のあらゆる手段を通じて増加させるということである。なぜなら資本の富は直接的に剰余労働時間の領有にあるからである。資本の目的は直接に価値であって、使用価値ではないからである。」（『経済学批判要綱』高木高二郎監訳657頁）

- ・ ハッカーたちは自らの「自由に処分できる時間」を使って、世界中の人たちと協力し「社会の富」である有用なプログラムを生み出し続けている。社会主義社会では、増大する「自由に処分できる時間」は、労働者の生命再生産の時間であるとともに、喜びのある真に生産的な労働時間ともなるであろう。

資料・注など

<ハロウィーン文書>

Linuxに代表されるオープンソース・ソフトウェアの長所・短所を克明に分析し、それへの対抗手段を検討したマイクロソフト社の戦略文書である。そこでは以下のように、あまりにも率直にLinuxの脅威を認めている。

- OSS（オープンソースソフト）はマイクロソフトにとって、短期的な収入とプラットフォームに対する脅威をもたらすものである——これは特にサーバの分野で顕著となる。くわえて、OSSに見られる特有の並行主義と自由なアイデアの交換は、われわれの現在のライセンス・モデルではまねのできないものであり、したがって長期的には開発者たちの意識や方向性に対しても脅威となる。

- OSSは長期的に信用できる・・・それへの対抗策として FUD戦術が通用しない。
・・・Linux やその他OSS 支持者たちは、OSSがその商業代替製品と少なくとも同じくらい——ときにはそれ以上——堅牢であるという議論を、ますます説得力をもって展開しつつある。

- OSSプロセスが、インターネット中の何千人もの集合的なIQを集めて、それを有効に利用できるという能力は、まさに驚異的なものである。・・・「OSSでは開発者資源は実質的に無料」なのである。潜在的な開発者のプールが巨大なので、ある問題に対して複数の異なる解決法やバージョンを同時に試してみて、最終的にいちばんいいのを選ぶという方法が経済的になりたってしまう。

そして、この脅威への対抗策としてあげているのは、

- Linuxは、サービスやプロトコルが共有物になっている限り勝ち続けられる。
・・・OSSプロジェクトが多くサーバ・アプリケーションに食い込めたのは、高度に共化された単純なプロトコルが広く使われていたからである。これらのプロトコルを拡張して新しいプロトコルを開発すれば、OSSプロジェクトの市場参入を防止することができる。
- Linuxへの対抗手段として、特許権や著作権を使う有効性については、今後検討を要する。

GNU 一般公有使用許諾書（冒頭部分のみ）

1991 年 6月, バージョン 2

Copyright (C) 1989,1991 Free Software Foundation, Inc.

675 Mass Ave, Cambridge, MA 02139, USA

何人も、以下の内容を変更しないでそのまま複写する場合に限り、本使用許諾書を複製したり頒布することができます。

はじめに-----

ほとんどのソフトウェアの使用許諾は、ソフトウェアを共有し、変更するユーザの自由を奪うことを意図しています。それに対して、我々のGNU 一般公有使用許諾は、フリー

・ソフトウェアを共有したり変更する自由をユーザに保証するためのもの、即ちフリー・ソフトウェアがそのユーザ全てにとってフリーであることを保証するためのものです。本使用許諾は、Free Software Foundation のほとんど全てのソフトウェアに適用されるだけでなく、プログラムの作成者が本使用許諾に依るとした場合のそのプログラムにも適用することができます。(その他のFree Software Foundation のソフトウェアのいくつかは、本許諾書ではなく、GNU ライブラリー一般公有使用許諾で保護されます。) あなたは自分のプログラムにもこれを適用できます。我々がフリー・ソフトウェアについて言う場合は自由のことに言及しているのであって、価格のことではありません。我々の一般公有使用許諾の各条項は、次の事柄を確実に実現することを目的として立案されています。

- ・フリー・ソフトウェアの複製物を自由に頒布できること(そして、望むならあなたのこのサービスに対して対価を請求できること)。
- ・ソース・コードを実際に受け取るか、あるいは、希望しさえすればそれを入手することが可能であること。
- ・入手したソフトウェアを変更したり、新しいフリー・プログラムの一部として使用できること。
- ・以上の各内容を行なうことができるということをユーザ自身が知っていること。

このようなユーザの権利を守るために、我々は、何人もこれらの権利を否定したり、あるいは放棄するようにユーザに求めることはできないという制限条項を設ける必要があります。これらの制限条項は、ユーザが、フリー・ソフトウェアの複製物を頒布したり変更しようとする場合には、そのユーザ自身が守るべき義務ともなります。例えば、あなたがフリー・ソフトウェアの複製物を頒布する場合、有償か無償かにかかわらず、あなたは自分の持っている権利を全て相手に与えなければなりません。あなたは、相手もまたソース・コードを受け取ったり入手できるということを認めなければなりません。さらにあなたは、彼らが自分たちの権利を知るように、これらの条項を知らしめなければなりません。

我々は次の2つの方法でユーザの権利を守ります。(1) ソフトウェアに著作権を主張し、(2) 本使用許諾の条項の下でソフトウェアを複製・頒布・変更する権利をユーザに与えます。

また、各作成者や我々自身を守るために、本フリー・ソフトウェアが無保証であることを全ての人々が了解している必要があります。さらに、他の誰かによって変更されたソフトウェアが頒布された場合、受領者はそのソフトウェアがオリジナル・バージョンではないということを知らされる必要があります。それは、他人の関与によって原開発者に対する評価が影響されないようにするためです。

最後に、どのフリー・プログラムもソフトウェア特許に絶えず脅かされています。我々は、フリー・プログラムの再頒布者が個人的に特許権を取得し、事実上そのプログラムを自分の財産にしてしまうという危険を避けたいと願っています。これを防ぐために我々は、いずれの特許も、誰でも自由に使用できるように使用許諾されるべきか、あるいは何人に対しても全く使用させないかの、いずれかにすべきであることを明らかにしてきました。複写・頒布・変更に対する正確な条項と条件を次に示します。

クロボトキンの『ある革命家の回想』より

「農奴を所有する一家に育ったわたしは、当時の若者たちみんなと同じように、命令したり指令したり、叱りつけたり罰したりといった行動の必要性について、まったく疑うことを知らぬままに成年に達した。しかしかなりはやい時期に、わたしは大がかりな企業を経営することになり、自由な人々と交渉することになった。そしてまちがい一つが重大な結果を招くような状況で、わたしは命令と規律という原理にしたがって活動するのと、共通の理解という原理に基づいて行動するのとの差をだんだん理解するに至った。前者は軍隊のパレードでは見事に機能するが、実生活において、目標が多く、重なり合う意志の真剣な努力によってしか達成できないような状況では何の価値もない」（山形浩生訳「伽藍とバザール」より重引、『ある革命家の手記（上）』岩波文庫273頁）

モリス（W.Morris）の『ユートピア便り』1890年（News from Nowhere）より

「『労働の報酬がないのにあなた方はどんな風にして人々を一生懸命働かせることができるのか』との問いに対して、未来の社会の住人はいぶかしげにこう答える。『労働の報酬がないとおっしゃるのですか。たっぷりありますよ。つまり創造という報酬が』。」（第15章「共産社会には労働の刺激が欠けていることについて」、杉原四郎『経済学原論Ⅰ』1973年、同文館98頁より重引）。ユートピア的ともみられるこの思想が、ハッカーたちにとっては現実の実感であるところが注目に値する。

また、マイクロソフト社の戦略文書「ハロウィーンⅡ」でも、筆者のVinod ValloppillilによってGNU/Linuxシステムを評価した体験が詳しく書かれている。

「わたしは UNIX プログラマとしてはあまり技能がないが、しかしDHCPクライアントのコードを追加的に拡張するにはどうしたらいいか、すぐに思いついた（その気分は爽快で、くせになりそうだった）。くわえて、まさにGPLと、完全な開発環境が目の中にあるおかげで、わたしはものの数時間もあれば、自分の変更点を書いてそれを電子メールで送れる立場にあったわけだ（NTでこの手のことをやる場合とはおおちがいだ）。そのプロセスに参加すれば、将来的に、もっと大きく野心的なLinuxプロジェクトにも参加できるようになっただろう」とフリーソフト開発の楽しさをあまりにも率直に述べている。Vinod Valloppillilは、執筆後1年たたない内にマイクロソフト社を退社し、Linux関連のベンチャー企業に移った。

レイモンドが考え、実行したマーケティング戦略は次のようなものである。「真のプログラマたちの回帰」より。

○ボトムアップはやめて、トップダウンで実行する。

最高経営責任者（CEO）、最高技術責任者（CTO）、最高情報責任者（CIO）

を務めるような人物の心をつかむ。

○Linuxは、最高のショーケースである。

Linuxに先陣をきらすことができなければ、他にその役目を果たせるものはいない。

○フォーチュン500企業に狙いを定める。

○フォーチュン500に影響力のある一流メディアを巻き込む。

ウォール街に殴りこみをかけるなら、社会の本流にある主要メディアを通じて行なうのが絶対条件である。

○ハッカーたちにゲリラ的なマーケティング術を覚えさせる。

ひと握りの外交官的人物がいくら説得力のある言葉でしゃべっても、現場レベルのプログラマたちが的はずれな主張をしていたら話にならない。

○オープンソースの認証マークを利用する。

オープンソースという言葉に認証マークとして登録し、「オープンソースの定義」と密着させて使用していく。

ディルクの「真の富＝自由に処分できる時間」について

マルクス『経済学批判要綱』大月書店 高木高二郎監訳 655頁。マルクスの引用では出典は[『＜国民的難局の＞原因と対策』、1821年、6ページ]とある。「(実在的富)」は、マルクスの注釈である。

『原因と対策』はリカード派経済学者ディルク (Charles Wentworth Dilke) 著の匿名パンフレットであり、杉原四郎氏によって著者名が明らかにされ、剰余価値学説形成にきわめて重要な論文であったことを枝松正行氏より教えられた(枝松正行「いわゆる”生命再生産”と経済学の体系転換」83頁『国際政経』2000年9月(第6号)二松学舎大学所収。また前掲、杉原四郎『経済原論I』99頁、注⑩を参照)。杉原四郎氏のこの著作によると、マルクスは『剰余価値学説史』21章でも、この匿名パンフレットを高く評価していたことが紹介されている。すなわち、マルクスは「一国は、資本に利子(ディルクでは剰余価値一般をさす用語:岡田)が支払われないとき、12時間ではなく6時間だけ労働がなされるとき、はじめて真に富裕である。富とは自由に利用できる時間であってそれ以外のなにものでもない」というディルクの文章を2頁の中で3回も引用し、「みごとな文句」(すばらしい文章:杉原氏)と評価している。さらに、マルクスはこの文章の真に意味しうるところを詳しく説明する。

「労働時間は、たとえ交換価値が廃棄されても、相変わらず富の創造的実体であり、富の生産に必要な費用の尺度である。しかし、自由な時間、自由に利用できる時間は、富そのものである――一部は生産物の享受のための、一部は自由な活動のための。そして、この自由な活動は、労働とはちがって、実現されなければならない外的な目的によって規定されてはいないのである。この目的の実現が自然必然性であろうと、社会的義務であろうと。

自明のことであるが、労働時間そのものは、それが正常な限度に制限されることによって、さらにそれがもはや他人のためのものではなく自分自身のためのものになり、同時に雇い主対雇い人などの社会的な諸対立が廃止されることによって、現実には社会的な労働と

して、最後に自由に利用できる時間の基礎として、まったく別な、より自由な正確をもつようになる。そして、同時に自由な時間をもつ人である人の労働時間は労働者の労働時間よりもはるかにより高度な質をもつにちがいないのである」（前掲『マルクス・エンゲルス全集26巻Ⅲ』335頁より）

FSF創立直後に発表されたFSF公式文書「GNU宣言」（GNU Manifesto）（著者はストールマン）<<http://www.gnu.org/japan/manifesto-1993j-plain.html>>の末尾。

「長い目で見た場合には、プログラムをフリーにすることは、欠乏の無い世界への第一歩であり、そこでは誰も生計を立てるためだけにあくせく働く必要はないだろう。人々は、週に10時間の課せられた仕事、例えば、法律の制定や、家族との相談、ロボットの修理、小惑星の試掘といった必要な仕事をこなしたあとは、プログラミングといった楽しめる活動に自由に専念することになるだろう。もはやプログラミングで生計を立てる必要はなくなる。

我々は既に、社会全体が実質的生産のためにしなければならない作業量を大幅に減らしてきたが、そのうちのほんのわずかが労働者の娯楽に変わっただけである。というのは、生産活動に伴い多くの非生産活動が必要とされるからである。その主な原因は、官僚主義と競争に対する差の無い骨折りである。フリーソフトウェアは、ソフトウェア生産の分野でこれらの乱費流出を大幅に減らすだろう。生産における技術的利得が我々にとっての労働の軽減になるよう、我々はこれを行なっていかなければならないのである。」

「欠乏のない世界」に向けて、人が到達し得た知的な富を公開・共有し、同じことを繰り返す非生産的な競争を廃する、という思想はきわめて重要である。レイモンドはハッカーの行動様式を「過剰がもたらした贈与文化」であり、「名声を競う評判ゲーム」として分析したが、ストールマンとFSFのこの思想こそより本質的な分析と展望である。

他方、マルクスは『経済学批判要綱』で次のように述べる。

「労働時間の節約は自由時間の、つまり個人の完全な発展のための時間の増大にひとしく、またこの時間はそれ自身ふたたび最大の生産力として、労働の生産力に反作用をおよぼす。・・・自由時間—それは余暇時間であるとともにより高度な活動にとっての時間である—は、いうまでもなくそういう時間を持っている者がある別の主体に転化するのであって、そのばあい彼はこうした別の主体として直接的生産過程にもはいつていく。これこそはすなわち、・・・成長した人間については、実行、実験科学、物質的に創造的なかつ自己を対象化する科学であって、この成長した人間の頭脳のなかに社会の蓄積された知識が存在する」（前掲661頁。マルクスによって「真実の節約—経済—＝労働時間の節約＝生産力の発展。自由時間と労働時間のあいだの対立の止揚。—社会的生産過程の正しい把握」とのタイトルが付けられている）。ストールマンの思想は、ディルクの思想を発展させたこのマルクスの思想と、驚くほどの一致を示している。
